
夜霧ノ幻影殺人姫

O R C A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜霧ノ幻影殺人姫

【NZコード】

NZ635N

【作者名】

ORCA

【あらすじ】

過去を変える術を得て、最愛の従者を取り戻そうとする吸血鬼は、霧満ちる街で何を見るのか

この作品は某サイトで私の書いた物の転載になります

人間はあまりにも脆すぎる。

【彼女】は時間を操る術を持っていた。

紅い館でメイドとして働き、主に絶対の服従を誓う完全完璧な従者。館の者全員から頼りにされ、その中で人間の【彼女】も笑っていた。

そんな時間が永遠に続くと、主レミリア・スカーレットは思っていた。幼かつた紅月は、それを疑わなかった。

ずっとお傍にいますよ。お嬢様……

いや、疑えなかつたのだ。

【彼女】が、そう言つたから。

「嘘つき……」

年月は既に幾巡も巡り巡つて、記憶すらもかされていた。
博麗の巫女も何度も代わり、森に住んでいた魔法使いも姿を見なくなつた。

空虚な時間は……いや、逆だ。

充実した日々だった時間は人間には長くとも、吸血鬼にはあまりに短い。

永遠と刹那の相違。

一生を永遠にも等しいと捉える人間と、人間の一生を刹那と捉える吸血鬼。

無情な時はどちらにも等しく訪れる。

「レミィ、少し良いかしら……」

図書館に住む友人、パチュリー・ノーレッジが部屋の扉を開けた。

館の住人は【彼女】を除いて誰一人変わっていない。パチュリーもまた、【彼女】が館を訪れるよりも前からここに住んでいた。

「何かしら」

長い年月ですっかり伸びた髪を払い、扉の前に立つ友人に歩み寄る。

何が永遠に紅い幼き月だろうか。

今となつては大人になつたデーモンロード……紅くとも幼くはいられない。

「レミィ……貴女、運命と過去、いえ、世界のルールすらも無視してねじ曲げてしまつ覚悟はある?」

「何を言つてゐるの? 戯れ言なら今はよしてくれないかしり」

「簡潔に言つわ。死んだ人間をここに連れてくる術を完成させたのよ」

「ツ!?

紅い瞳が見開かれる。

喉の奥から短く吐息が漏れるのが分かつた。

言葉が、呼吸が、視点が……全てが狂うよつた感覚がレミリアを襲つ。

「でもね、それは世界のルールから外れる事なの。過去には、本當は干渉してはいけない」

「…………なやー…………」

「レ//イ？」

「黙りなさいパチエ。ルールが何だと言うの？ そんなものの誰が決めたの？ 神様？ だったら私には関係ないわ。悪魔は神のルールになんて従わない」

パチュリーが微笑のまま嘆息した。

少なからずパチュリーもこの返事を望んでいたのだらう。

「図書館に来なさい。準備はできているから」

その魔法は世界を構築する力を一時的に逆流させ、時間という概念を回帰させるというものだ。

無論、そんなものに巻き込まれれば人間でなくともタダでは済まない。

莫大なエネルギーの奔流に飲み込まれ、刹那の内にバラバラになつてしまつ。

吸血鬼の肉体を持つてして、無事な保障が無いのだ。

「怖気づいた？」

「まさか。運命すら私を殺せないのよ」

魔方陣の真ん中にレミコアが立っている。

陣は三重。

最も外側の陣は魔法の影響が周囲に及ばないようにする結界の役割を果たすと同時に、八雲紫のような存在に感付かれないと保険を兼ねている。

一つ目は空間転移の魔方陣。

【彼女】の力の一部を感じし、その付近にレミコアを飛ばす為のもの。

そして最も内側にあるのが、時空回帰の魔方陣だ。

「……から先、私はサポートしてあげられないわ……術の有効期間はおよそ三日間。

それまでに【彼女】にこちらへ来るのを望ませられれば成功。想いが魔法回路を書き換えて安全に転移させる事が可能よ。例え失敗しても、帰りは安全よ。回帰と経過じや難易度が全然違うの」

「分かったわ」

レミリアは短くそれだけ言つと、大きく呼吸を整える。時間の感覚すら忘れてしまう程に長かった。再び会える【彼女】を思い浮かべ、口元が笑みを作る。

「行くわよ」

刹那、陣に光が満ち、レミリアは姿を消した。

街灯の薄明かりが、シルクの外気をぼんやりと照らしている。

身体中に走る激痛は、しかし夜気に当てられたひんやりして薄れていく。

「じいかしり……」
「の様子だと、じいせり成功したらじー。」
ミリアは辺りを見渡した。

「じーかしり……」

レンガ作りの建物が建ち並び、その間を縫つように淡い明かりが
照らしている。

辺りには霧が立ち込め、へばりつゝよつた湿気が肌を撫でる。

気持ち悪い。

純粹にそんな感想が彼女の口から漏れた。

「おかしいわね……」

パチュリーの話だと、あの魔法は過去へ回帰するもののはずだ。
しかし、レミコアの記憶にこんな街並みはない。

と、ならばこゝは幻想郷ではない？

「お嬢さん」

突如聞こえた声に振り返る。

見ればそれは、黒い外套を纏つた人物だった。

顔が見えなくて、男女の判別はできない。

声から判断しようにも、口元を何かで覆っているのか、ぐぐもつ
ていて分かり辛い。

でもこの声、何処かで聞いた覚えが……

「こんな霧の夜に一人で出歩くなんて、命を捨てるようなモノです
よ」

「あら、何故かしら？」

「夜霧に紛れて、殺人鬼が貴女を狙っているかも知れない」

「『忠告ありがとうございます。でも大丈夫よ鬼には慣れてるわ』

何せ、自身も吸血鬼なのだから。
嘲笑にレミリアの口元が上がる。

「では、せめて気をつけてください。切り裂きジャックは女性ばかりを狙いますから」

「ええ、分かつたわ」

外套の人物はレミリアの隣をすり抜けるようにすれ違う。
肩と肩の触れ合つかという距離で、一言。

「……ジャックが【彼女】ですか……」

「え？」

慌てて振り返ると、そこに外套の人はいなかつた。
まるで、あの小さな鬼の霧に包まれた気分だ。

「まあ良いわ。それより、日が昇る前に宿を探さないと……」

幸いにも今は月夜だ。

が、時間は等しく流れる。

残念ながら明けない夜はないのだ。

「こんばんは……お嬢さん」

刹那、背後から声が聞こえた。

同時に、激しい痛みが熱となつてレミリアを貫く。

「蠱惑的な夜に貴女に会えた事は、今宵私にとつて最大の幸福ですわ」

聞き違えるはずもない。

「随分と情熱的なファーストコンタクトだこと……切り裂きジャックさん」

壊れたブリキ人形のように、ゆっくりと首を背後に向ける。

「お気に入りでしたでしょうか？」

銀色の短い髪、赤い瞳、透き通るような白い肌。
否定する要素もない。

その顔は、紅魔館にてメイド長を務めていた女性。

十六夜咲夜そのものだった。

しかし、今の彼女はレミリアが見たこともないくらい愉悦しそうに、
そして醜く口元を歪ませている。
あの瀟洒な姿は、微塵も見られない。

「そうね……でも」

「！？」

レミリアが、服の下に隠した翼を大きく広げた。

背後からナイフを刺していたジャックは、その羽に強く叩かれる
事になり、思わず後ずさる。

霧の街に、紅い悪魔が翼を広げた。

「私をダンスに誘つなら、もう少しマナーを心得なさい」

振り返り、ジャックを正面に据える。
黒いコートと黒いスカート、口にはタバコをくわえ、ナイフを持つ
ついているであらわの手はポケットだ。

「吸血姫と踊るつもりはあるかしつ？ 殺人姫さん？」

「……この殺人姫、自からダンスを申込んで逃げるなんて無粋な真似はできませんわ」

スカートの両裾を摘み、まるで舞台役者のよつに礼をする。

やつぱり咲夜だわ……

闇夜の下、ジャックの姿が消えた。
先ほどまでそこにいた余韻は霧に残るが、しかしそれすらすぐには
焼き消える。

「……時間停止ね？」

「一？」

背後から振り下ろされたナイフが、ピタリと止まった。

ジャックの腕をレミリアが掴んだのだ。

貴女の考える事なんて分かるわよ……

そのままレミリアは力任せにジャックを放る。

「素晴らしいですわ……強くて美しいお嬢さん。是非ともこの私にお名前をお聞かせ願いたいのですが」

「他人に名前を聞くなら、『自分から名乗るのが礼儀でなくて?』

「不祥、この殺人姫。名前を持ち合わせていないものとして」

知ってるわ。貴女の名前は私が付けたのだもの……

「これは失礼したわね。私はレミリア・スカーレット。とある館で長年主をしているわ」

断続的な痛みがレミリアを襲い続ける。

吸血鬼の、いや、あらゆる存在の弱点である心臓を鎖で絞められるような鈍痛だ。

過去に一度、咲夜を失った時と同じ。
しかし、レミリアは「の痛みの明確な名称を知らない。

「では、レミリアお嬢様ですね」

「貴様は私を、その名称で呼ぶなー。」

怒声と共に、赤い霸気がレミリアから噴き上がった。
それは瞬く間に夜霧を、空気を、空を星を月を、紅く染め上げて
ゆく。

「あーり……？」

不意にジャックが目許を拭う。
血液が、涙のように滴り落ちてゆく。

「貴女に名前をあげるわ。絶対的運命共同体として、このレミリア・
スカーレットが貴女を命名する」

「なんで、なんで止まらないのよー。」

溢れる血の涙を、泣きじゃくる子供の手で拭い続けている。

「 今宵から貴女は咲夜。 十六夜咲夜よー。」

「ああああアアアアアアアアアアー！」

その一言が決め手となつた。

ジャック、いや咲夜は突然、ナイフを落として頭を抱えると、夜霧に、時間の感覚すら狂いそうなシルクの中へと駆けて行つた。

しかしレミリアは追わない。

否、追えなかつた。

「まさか……咲夜と同じ銀のナイフだったなんてね……」

翼のやや下、最初に咲夜に刺された場所から赤い染みが広がつてい。

銀は聖なる金属。

悪魔やその眷族に対しても有効な武器となる。
吸血鬼も、銀は弱点の一つだ。

少し、格好付けすぎたかしらね……

出血が予想外に酷く、意識が朦朧としあじめた。

「駄目よ……こんな場所で倒れたら、朝になってしまつわ……」

しかし、体の自由が効かなくなってきたのが分かる。

次第に歩みは足を引き摺る形となり、地面を這う形に変わり、レミリアはやがて動けなくなつた。

彼女を中心に血沼が広がり行く。

致命傷ではないが、回復には相応の時間を要するだらう。

「時間なんて……無いのに……」

意識が溶けるのは刹那だつた。

冷たい地面に倒れ、レミリアはまどろみの誘惑に身を任せた。

霧の下、吸血鬼の姫は【彼女】の名前を呼ぶ。

「咲
夜
」

「目が覚めましたか？」

「ツ！　え、ええ……」

息を飲む。

目が覚めた場所は室内、見知らぬ木の壁に囲まれた一室だ。

仄かな木の香りと、しかし人的な明かりに照らされた暗い部屋には、レミリアの他に後一人の人間がいる。

銀色のショートヘア、青を基調にしたメイド服、三つ編みを縛る緑のリボンと、その声音……殺人姫、いや彼女はまさに【十六夜咲夜】その者だった。

「良かつた、昨日の夜に血まみれで倒れてる貴女を見たときは心臓が止まるかと思いましたよ」

柔らかい笑みを向けて、彼女は紅茶を注いでくれた。

どういう事？

昨晩、レミリアに瀕死の重傷を負わせた殺人姫、彼女は間違いなく咲夜だ。

しかし、今レミリアの眼前に居る女性も咲夜にしか思えない。

「貴女、名前は？」

「すみません、記憶喪失という状態らしくって……お嬢様とみんなからはディーラーと呼ばれています」

「ディーラー……いやそれより、お嬢様？」

「ディーラーはレミリアの空いたカップを下げる時、金属の盆に乗せる。」

「ディーラー、吸血鬼さんは起きたかしら？」

部屋の扉が開き、小さな女の子が顔を見せた。

「あ、お嬢様」

「 ッ！」

再びレミリアは言葉を失つた。

ディーラーがお嬢様と呼ぶ少女は、【自分】だった。
いや、正確には違う。

幼かつた、咲夜や白黒の魔女、あの代の博麗の巫女と過ごしてい
た幼い月の、【レミリア・スカーレット】だ。

パラレル……ワールド……

過去に一度、八雲紫から聞いた事がある。

世界には平行して存在する別の世界が存在する。

(そこには、ある存在に対応する存在が必ず存在するのよ)

聞いた時は意味が分からなかつた。今だつて、明確には理解でき
てない。

しかし、受け入れるしかないのだ。

咲夜だけではない、自分に出会いてしまったのだから。

「私はミルレア。貴女の名前は？」

「…………レニア・スカーレットよ」

平静を装つ。

ミルレアに翼は無い。服装も違えば、帽子も被っていない。

「ミルレア、貴女に妹はいるかしり?」

レニアから質問されることを予期してなかつたのか、ミルレアはキョトンとした顔を見せている。

言葉を失つたミルレアの代わりに、返答したのはティーラーだつた。

「…………そう、いないのなら良いわ」

どうやら、世界はそこまで都合よくできとはいいらしく。

考えてみれば、ミルレアのこの家は門番を抱えるような屋敷には見えない。

喘息持ちで根暗な友人が根城にしてそうな図書館もあるとは思えない……だとすれば、このティーラーとミルレアの二人は偶然引き合わされた事になる。

皮肉な運命め……【私】から【彼女】を奪えと言ひつ的一

「…………どうされました？顔色が悪いようですが」

「…………ありがとうございますティーラー。大丈夫、何でもないわ」

ティーラーの怪訝そうな表情は消えない。

「ねえ吸血鬼さん。貴女はどこから来たの？」

唐突な問い掛け。

ミルレアの語調に含まれる無邪氣さは、昔の自身よりも妹のフランを彷彿とさせる。

ミルレアは爛々と瞳を輝かせ、レミリアを吸血鬼と呼ぶ。その隣のティーラーは困ったような微笑を浮かべている。

そんな光景に、レミリアはまた心臓を握り潰されそうになる。あまりに似ているのだ。

楽しかった紅魔館の日々に。

あの日々の自分たち」。

「私は……」

言おうとして、言葉が詰まる。

僅かに首を振り、レミコアはゆっくりと口を開いた。

「紅い館からやつて来たのよ。切り裂きジャックさんって知り合いで会いたい」

「あ、どんな反応をする?」

もはや、ティーラーとジャックが同一人物なのは疑つ余地もない。

「レミコアさんは、切り裂きジャックのお知り合いなのですか?」

え?

ティーラーのあまりに検討違いの反応に、レミコアの言葉が再び詰まる。

「でしたら、彼を止めてください。ミルレアお嬢様の御両親のためにも

ミルレアの父親は警察官だったらしい。

母親は若くしてミルレアを出産し、裕福ではなくとも温かな家庭だった。

そんなある日、切り裂きジャックによる猟奇殺人の最初の被害者が現れた。

ミルレアの父親は、当然警察官としてジャックを追い始めた。

しかし、ジャックはこの町に立ち込める霧のように姿が見えない。何一つ手掛かりを掴めないまま、被害者は増え続けて行った。

ある日、ミルレアが母親の手伝いでお使いに行つた。

久々に父親が休みで、家族水入らずの時間を過ごしていたその日、帰ってきたミルレアの眼前に地獄が広がった。

血の海と化した家と、変わり果てた両親。
彼女が悲鳴を上げたのは、必然だった。

ディーラーがミルレアと出会ったのはその時だ。

「私は悲鳴を聞き付けてお嬢様の元へ向かいました」

これが、ディーラーの持つ最初の記憶だそうだ。
ディーラーは何故自分がそこに居合わせ、何が起きたのかすら理解できぬままミルレアを保護した。

「ミルレアお嬢様の御両親は、自らに保険を掛けておられました。警察だったお父様はこうなる事を予期していたのではないでしょうか」

饒舌なディーラーの声音は、しかし暗い。
ミルレアはすでに口を固く閉ざし、俯いていた。

時折その肩が小さく上下するのは、泣いているからだろう。
家族を失う苦痛。
血は繋がつていなかつたが、主と従者という関係ではあつたが、
レミリアと咲夜は確かに家族だつた。

.....

ミルレアに掛ける言葉が見つからず、レミリアはついに口を開いた。

その後、泣き疲れたミルレアを寝室に寝かし、ディーラーは居間に紅茶をレミリアに振る舞つていた。

「美味しいわ……」

「ありがとうございます」

素直な感想がレミリアから漏れた。

ディーラーは軽く頭を下げ、自身もソファに腰掛ける。

日が暮れ始め、柔らかな橙色の光が窓から射し込んでいる。レミリアはそれに触れぬよう、部屋の奥に座つていた。

「ディーラーって名前、どうしたの？」

「私は夜間、カジノでディーラーとして働いているんですよ。トランプゲームが得意でして。それで、そのまま呼び名として使っていきます」

「へえ……嫌いじゃないわよ。その名前」

ディーラーが口の端に柔らかな笑みを浮かべた。

「トランプ……ね。ねえディーラー、私と勝負しない？」

「え？」

レミリアが懐からトランプを取り出した。

咲夜の愛用していた、古いトランプだ。

レミリアは素早くシャツフルし、上から五枚を机の上に伏せた。

「ポーカーよ」

表返すと各絵柄の4のカードが4枚とスペードのHース。フオーナブ・アカインドの役を揃えていた。

「チップは無し、乗るか降りるかの一回勝負。親はあげるわ?」

「ふふ、手加減しませんよ?」

ディーラーが手慣れた動作でカードを切る。
カットとシャツフルを繰り返し、一人にカードが配られた。

「私は一枚カードをチエンジします……痛つ」

「ちょ、大丈夫？」

カードの端で指を切つたらしい。

ディーラーの白い指に赤い点が小さく浮いていた。

「貸しなさい」

「え？」

レミリアがディーラーの指を口に含む。

滲む血液がレミリアの口内に広がるのが分かる。

咲夜の血もよく飲んでいた。流す血のほとんどは鼻からだつたが。

懐かしい味ね……

思い出すんじゃなかつたわ！

「あ……あの、レミリアさん」

見れば、ディーラーが困った表情で頬を赤らめている。考えてもみれば、年上の女性に指を舐められているのだ。

それは同性でも恥ずかしい。

「血は止まつたわ。一応、傷が開かないように絆創膏だけはしつきなさい」

「あ、はい」

ディーラーはすぐに人差し指に絆創膏を貼ると、再びトランプを持つ。

「私のチェンジは終了です。この手札ならば戦えます」

「私は……そうね、五枚全部変えるわ」

「え？」

ディーラーが驚きの表情を浮かべる。
しかし、すぐに平静を取り繕い、カードを配り始める。

「ディーラー、貴女トランプが得意って言つたけど、ポーカーの勝率は？」

「100パーセント。ポーカーに限らずトランプで負けた事はないぞいません」

少しばかり得意気に、しかし決して漫然とはしない笑みを浮かべたまま、最後のカードをレミリアに配り終えた。

伏せたカードを見て、レミリアが密かに、ディーラーですら気付かない微笑を口許に浮かべた。

「では、カードを確認し」

「コール」

ディーラーが呆然とする。

レミリアは、配られたカードを確認すらしていないのだ。

「聞こえなかつたのかしらディーラー？　コールよ。私はこの手札で勝負するわ」

「…………分かりました。では私もコール。その勝負乗ります」

ディーラーの手札には、スペードのエース4枚のフォー・オブ・アカインドが揃っている。

「ねえディーラー……」

レミリアが不敵な笑みで、カードをめくつてゆく。
一枚目はクラブのクイーン。

ディーラーがイカサマを仕掛けた事は、レミリアも承知している。
いや、あえてそうさせようとした仕向けたのだ。

「貴女……」

「え？」

一枚目はダイヤのクイーン。
配った記憶のないカードに、ディーラーから短い言葉が漏れる。
レミリアに、ワンペアが揃つた。

「一度……」

スピードのクイーンが姿を見せる。
スリー・カードが完成した。

「知つてみると良いわ」

ダイヤのクイーンの出現と共に、スリー・カードがフォー・オブ・
アカイングドへと昇華する。

「まさか……」

レミリアの指がゆっくりとカードを持ち上げる。
ディーラーが息を飲み、カードをひたすらに凝視する。

時が止まるような錯覚が、ディーラーを襲う。

現れたカードは…………ジョーカーだった。

「運命に敗北する気分を

レミリアの役はファイブ・オブ・アカインド。ロイヤルに匹敵する最強クラスの役だ。

「どうやって……」

「理由なんてないわよ。必然が偶然に変わっただけ……

純粋な敗北だった。

絆創膏で手元が狂った事に、デイーラーが気付いたのは、レミリアがそれを指差した時だ。

気付いてなお、デイーラーは信じられない様子だ。

「楽しかったわデイーラー。また勝負しましょ」

デイーラーが何か言つよりも早く、レミリアは部屋を出た。

日は完全に暮れ、辺りには夜の帳が降りている。

レミリアは外気に立ち込める霧を睨む。殺意の奔流を隠し持つ、深い霧を。

「また勝負しましょ？ 殺人姫……」

武田目・夜

相変わらず霧の深い街並みだ。
足元を照らすべき街灯の光すら、白いベールに遮られて役目を果たさない。

白と薄い光、それに静寂が支配する景色に、しかしそこには文面通りの莊厳さは無く、あるのは獸の如き殺意の奔流だけだ。
街を一望できる場所、時計台の頂上からレミリアは街を見渡していた。

霧が深くてよくは見えないが、それでも何か動いているものくらいは見える。
動く気配と、影からレミリアはそれを探していた。

紅色の瞳が、辺りを見渡し続ける。

殺人姫。

この街に突如として現れ、獵奇殺人を繰り返す切り裂きジャックの正体だ。

そして彼女こそ、レミリアがこの場に現れた理由でもある。

昼間のディーラーが演技をしていたように見えなかつたわ

……

倒れたレミリアを助けた少女、ミルレア。

そのミルレアに仕えるメイドであるディーラーと殺人姫、そして十六夜咲夜は同一人物としか思えない顔をしている。

顔だけではない。

声音も、内に湛える雰囲気も……全でがレミリアには苦痛だった。

「……見つけたッ！」

赤い双眸が一点を捉える。

人間の視力では、到底認識できない距離だ。

暗い月夜に、レミリアは両翼を広げる。

猛々しく、そして優雅に。

時計台の屋根を軽く蹴り、重力に身を任せた。

まわりつくよつの夜霧さえもレミリアには追いかず、疾風と

化した彼女は風すらも置き去る。

今ならば、あの鴉天狗にも勝てるかもしない。

やがて地面に足を着き、遅れて風が髪を撫でた。

「こんばんは、咲夜」

「あら、吸血鬼の御嬢様ではありますか」

レミリアと殺人姫、それぞれがお互いに挑発的な呼び名を使う。二人を包む白い霧は、ぼんやりとだが紅と黒に染まってゆく。

無言の殺劇。

霸氣と殺氣がお互いを飲み込もうと、混じり合いつ。

「……『ティーラー』という女性を』存知かしら?』

まず、レミリアが口を開いた。

返事の内容には興味がなかった。そつではなく、問い合わせに対する殺人姫の反応を見る。

「無料な方ですね。私と言ふ者がありながら、この場で別の女性の話をなさるなんて」

鼻先に嘲笑を浮かべ、殺人姫は舞台役者のように辺りを歩む。

分からぬ……

殺人姫の思考は本当に読めない。

感情の起伏を忘れたように、全てが平淡に見えて。

全てが芝居。

世界は舞台で主演は彼女

。

虚偽と濃霧の演目は、果たしてどのように幕を閉じるのか。

彼女は、どのような台本を演じているのだろうか。

「咲夜、ディーラー、どっちでも良いわ……貴女は殺人姫なんかじゃない

変わり果てた、思い出を全て否定するような、目の前の女性に、レミリアはこうよつと告げる。

「貴女は、誰かに尽くして殺しすら」とわなくとも、殺しを楽しむ
よつな人間じやない！」

「……御嬢様……」

消え入るよつな小さな声で、しかし確かに、殺人姫の口からはそ
う聞こえた。

「咲夜！」

「 戯れ言ね」

「 ー？」

赤い瞳を細め、震むようにレミリアを見下す。

「その一人が誰かは知らないけれど、私は私。吸血鬼ごときに理解
を求めるつもりもないわ」

「……そう。もう良いわ」

レミリアを包む霸気が、色を濃くする。

憤怒を表現するかのよつた赤い霧が、殺意を孕む黒い霧を飲み込んで行く。

「知らないのなら叩き込んであげる。忘れたのなら一度と忘れられないように刻み込んであげる」

紅霧の中、レミコアが巨大な翼を広げた。

「貴女の主が誰なのかを……！」

霧が、動いた。

空気の流れができるよりも早く、レミリアが超低空を駆ける。

遅れて発生した乱氣流は、赤い霧の姿をねじ曲げ、無数の腕のように戦人姫に雪崩れ込む。

咆哮の如きレミコアの暴力的なスピードに対し、戦人姫は水面に舞う黒蝶のような脚捌きで優美に回避する。

回避の動作から一転、懷から取り出したナイフをレミコアへ向けた。

「それを下げる……咲夜！」

「 ッ！？」

レミリアの飛翔により巻き起こされた暴風は、霧を携えて赤い蛇と化し、産み出された赤い蛇は殺人姫を容赦無く呑み込んだ。

「……何とか逃れたみたいね？」

「腕をもがれるかと思いましたわ……」

背後に立つ殺人姫に、レミリアは振り向く事もせずに声を掛けた。時間停止が間一髪で間に合った殺人姫だったが、コートの右肩から先が無くなっている。

レミリアは飛翔の際に、地面を僅かに砕いていた。

風と霧に忍ばされた岩片は、速度によつて破壊力を授かり、真空波の如き刃となつて襲い掛かったのだ。

「でも、止まつた時間の中なら速度は関係なくてよ？」

刹那、いやその間隔すら存在しない。

まさにその瞬間だ。

レミリアの視界いっぱいにナイフが姿を現した。その全てが、瞬きする間も無いままに飛来する。

「舞台の踊り子には、触れないのがマナーよ」

レミリアはその場でドレスを披露するようにクルリと回る。その動作に引かれた翼は、盾となつてナイフを叩き落とした。

「ほら」

「え？」

殺人姫の頬を、何かが掠めた。

次の瞬間、殺人姫の背後にあつた壁に、銀のナイフが深々と刺さつた。

レミリアは身を守る動作の中、一本だけナイフを通し、それを掴

んでいた。

翼から姿を現すと同時に投合し、今の結果を生んだのだった。

「従者が主に勝てる訳がないじゃない」

「まだよー！」

殺人姫はどこから取り出したのか、無数のナイフを投合してくる。

時間の停止を仕込み、速度も密度もバラバラな弾幕。

それはかつて、十六夜咲夜の使ったスペル【奇術 エターナル・ミーク】そのものだった。

「懐かしいわね」

対し、レミリアは足下に散乱したナイフを突風で巻き上げる。

「ハアアアアツ！－！」

その全てを超高速で殴りつける。

レミリアの殴ったナイフは殺人姫の投げたナイフにぶつかり、その「ことじ」とくを地面へ叩き伏せた。

「さあ、咲夜。再び私の前に跪きなさい」

「……うつ！」

ナイフの波と共に飛来したレミリアは、殺人姫の首元に牙を埋めた。

吸血鬼の口付け。

体の力を根こそぎ奪われ、殺人姫の膝がぐらつき始めた。

「……っ！」

ナイフをレミリアに埋めるも、浅い。
しかし牙を離す事はできた。

「……はあ……っはあ

「美味しかったわよ？」

色っぽく唇を舐め、レミリアは蕩けたような視線を殺人姫へ送る。一方の殺人姫は、立っているのも厳しいのか、肩で息をしながら地面へ膝を付いた。

「…………まあ、またお会いしましょ」吸血鬼の御嬢さん……」

レミリアが瞬きをすると、そこにはも殺人姫の姿は無かった。

「ええ」

再び唇を舐める。

今飲んだ血と、毎間に飲んだ血の味を忘れないように。
霧の中、レミコアは小さく呟く。

「また会いましょう」ティイーラー……

終夜

駄作……

駄作駄作駄作。

駄作駄作駄作駄作駄作！

つまらない、つまらないつまらない……シマラナイシマラナイ！

世界はツマラナイ！
パズルみたいに、そのピースみたいに、組み込まれた輪廻を巡り
……なんて芸の無い台本だらうか！

主演をオロセ。

舞台を口ワセ。

ワタシヲ、カイホウシテ……。

「やめて……誰ですか？ 私は私！ 私に貴女は必要無いー！」

「じゃあ、貴女は誰？」

「ツー？」

ディーラーの部屋に入ったレミリアが見たのは、頭を抱える銀髪の女性。

「殺人姫？ ディーラー？ それとも……咲夜？」

「わ、私は……私は……」

「言い逃れはできないわ？ もう分かっているのでしょうか？ そこに倒れてるミルレアは、貴女が刺したのよ」

「え？」

銀髪の女性は視界を前に向けた。

血沼の中に、この家の主が倒れている。

蒼白な顔は、既に手遅れである事を示し、しかし僅かな呼吸が赤い水面を揺らしている。

「う、うああああー！」

銀髪の女性は狂ったように叫び、手にしたナイフを振り上げた。

「コレ……テ、オワル……」

狂喜に歪む口元と、紅色の瞳は彼女が殺人姫である事を物語つていた。

「それを伏せると何度も言わせるな！」

吊っていた糸が切れた操り人形のように、殺人姫の四肢が崩れた。指先からナイフが滑り落ち、床に叩き付けられて乾いた音が鳴る。

殺人姫は虚ろな瞳で天井を仰ぎ、赤い涙がその頬を伝う。日が射し込む窓の前に、しかし肌が悲鳴を上げるのも気にせず、レミリアは歩む。

ミルレアの前に膝を突き、幼い自分の幻影を抱え揚げ……牙を埋めた。

昔からの小食は今も同じで、一度に大量の血液は飲めない。

が、致死量まで血液が抜けていれば、残りを飲み干すくらいは容易だ。

人間が、体内の血を全て吸血鬼に飲まれた場合、どうなるか？

「許して、貴女を助けるにはこれしかないの……」

同族……つまり、吸血鬼となる。

しかし、それは一度と口光の下に出られない事を暗喩していた。

止まりそだつたミルレアの呼吸は次第に整い、やがて静かに寝息を立て始めた。

「…………さて、殺人姫…………いえ、ティーラーに取り憑いている【切り裂きジャック】ね」

「…………いつから気付いていた?」

レミリアが振り返ると、黒い霧がティーラーの体から浮き上がっていた。

切り裂きジャック。

それすらも便宜上の名前でしかないだろ？。

それは、亡靈。

それは、殺意。

それは、輪廻。

それは、……鬼。

「殺人鬼さん、 そろそろ退場する時間よ？」

レミリアの言葉に、ジャックは姿を取る。

「ふざけた奴ね……」

「ふふ、お気付かれましたか？」

ジャックの姿は、幼い頃のレミリアそのものだ。

黒い影のレミリアは、しかし声音は咲夜のままである。

「幻想郷では、鬼は顯現できない……貴様は咲夜の中で成長し続けていた」

「（）明察、貴女やあの小鬼のようなイレギュラーはあれど、実体を

持たない私のような存在は、鬼は居ないという概念に縛られた幻想郷では存在できない

「だから咲夜を殺人鬼にしないで、いや、できないでいたのね」

しかし、ここでは違う。

誰もが霧に潜む殺人鬼の存在を知り、怯え、認めている。

だから咲夜に、ディーラーに取り憑いた殺人鬼は、切り裂きジャックという名前を借りて現れたのだ。

「言い残したい事はあるかしら?」

「霧の私を消すつもりかしら? 無理ね。私は再び咲夜に戻り、貴女を殺す……」

「神槍……」

「遅いですわ」

赤い槍を構えるレミリアを嘲笑うように、殺人鬼はディーラーへと還る。

はすだつた……。

「なつ……」

見れば、黒コニアを捕縛するよひに、白い霧がまとわりついでいた。

「捕えたわよ」

「 ッ咲夜ー!？」

白い霧が、レニアが探していた相手、十六夜咲夜の姿に変わる。

「申し訳ございません、お嬢様……こつまでも貴女の側にいると約束したのに……」

レニアの視界が、薄くぼやけた。

「従者として……貴女の誇るべし私として……共にいたかった……」

涙が止まらない。

古い記憶が、思い出が、決壊したダムの水のよじて流れ出す。

「お嬢様が誇つてくださった、完璧で瀟洒な従者、十六夜咲夜は……永遠に貴女の味方です」

「やめて、咲夜！ 私と帰ろう？ パチHや、フランや、美鈴や小悪魔や、他の皆も咲夜の帰りを待ってるのよ？」

しかし、咲夜は微笑むだけだ。

黒いレミリアはもはや言葉を発する事もできず、優しい光を放つ霧に飲み込まれかけていた。

「私と、私の殺意の因果を断るのは、お嬢様だけです……どうか、この不躾なメイドをお許しください……さあー グングールを！」

もう、そこに成長した高貴な吸血鬼は居なかつた。

ただ、自らの手で、愛する者との決別を余儀なくされ、泣きじやくる子供がいるだけだ。

「スピア・ザ……」

咲夜が柔らかい笑みを向けた。

自身を愛してくれて、自身もまた愛した相手に。

最愛の、主に。

「 グングニル——ツ——！」

紅色の槍が投ぜられ、透明な雲が宙に舞つ。
咲夜は最後の瞬間まで笑顔だった。

そして、レミコアは最後に確かに聞いた。

いつまでも、愛しております……お嬢様

紅色の槍は、黒と白の霧を飲み込み、完全に消滅させた。

日は、暮れている。

氣絶するティーラーと、寝息を立てるミルレアを他所に、レミリアは一人泣き崩れた。

咲夜は見ていたのだ。その命死きてなおも、氣付かれないままに主に支えていた。

完璧で瀟洒なメイド。

十六夜咲夜は、主の為に因縁すら超えて姿を現した。

「……私は貴女を誇るわ……咲夜」

レミリアがゆっくりと立ち上がる。いまだに涙は頬を伝い落していた。

「時間みたいね……」

レミリアは、自分の体が光に包まれて行くのに気が付いた。転移してから一度三日が経ったのだ。

ミルレアをベッドに、ティーラーを椅子に運び、レミリアは静か

に姿を消した。

最後に彼女がいた場所には、トランプカード、スペードのエースが残されていた。

to...next

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2635z/>

夜霧ノ幻影殺人姫

2011年12月19日12時47分発行